



〔書評〕
70

鏡に映つた自己

盛山和夫

高野陽太郎

『「集団主義」という錯覚 —日本人論の思い違いとその由来』

いかもしれない。

「日本研究」がかつて一九八〇年代における日本経済の世界的なプレゼンスの高まりを背景にして拡大したことからすれば、その後の長期にわたる経済の低迷とそれと対照的な中国や韓国の著しい経済発展に伴って、欧米の学界の関心が、日本社会から中国社会や韓国社会にシフトするのはやむをえないことだろう。しかし、もっと大きな背景もある。それは、二〇世紀のほぼ一〇〇年間というもの、日本は近代化に成功した唯一の非西欧社会として特別な地位を自他ともに認められてきた。その特殊性が失われたのである。ヴェーバーの「なぜ西欧だけに資本主義が発達したのか」という問いに呼応するかたちの「非西欧社会でなぜ日本だけが近代化を達成したのか」という問題意識が、日本研究を動機づけていた大きな要因だった。

「日本人論」という研究ジャンルの成立は、おそらくその問

トーン政権の時代に、アメリカの対アジア外交が日本を飛び越して中国だけを相手にしているのではないかという懸念を表現したものだが、最近、人文科学や社会科学の分野で、欧米の学界においては、人文学や社会科学の分野で、欧米の学界における「日本研究」の地盤沈下とそれに代わる「中国研究」の興隆をさしても使われている。なんとなく囮われものの嫉妬心のようなものが見え隠れして、あまり品のいい言葉とはいえない

「集団主義」という錯覚

日本人論の思い違いとその由来

高野陽太郎

著者

装丁：虎尾 隆
四六判・360頁・税込 2835円
2008年・新曜社

本人論の主張の妥当性に疑問を投げかけるとともに、方法論的問題を論じている。このあともう新たな日本人論は出てこないだろうと私は予測したのだが、案に相違して、むしろ一九八〇年代に日本の経営論というかたちでの隆盛がみられたりした。

二

題意識と無縁ではない。R・ベネディクトの『菊と刀』が当初どちらかといえば近代主義的な知識人のあいだで評価されたのも、そのことを示唆している。日本的なものを擁護しようとする観点からだけではなく、それを乗り越えてより近代的で普遍的なものをもとめる人びとも、日本人論に自らコミットした。非西欧にして唯一の近代社会、そのアイデンティティの模索が日本人論を支えてきたといえる。

日本人論は、純粹に学術的な研究としてよりはむしろ一般的な知的関心に答えるかたちでさまざまに生産されてきたのが、同時に、批判も少なくない。比較的早い時期の批判的論考の代表に、杉本良夫／ロス・マオア『日本人は「日本的」か』（東洋経済新報社、一九八二）があつて、社会学的な観点から日

を取りあげて、実証的で学術的な研究の成果によってその当否を検証し、ついでなぜそつた誤った命題が通説として広く流通しているのかについて考察して、論争にあらたな一石を投じた書物である。学術的な研究をベースにしながらも、一般向けの書物としてきわめて平明で分かりやすく書かれており、私は読み始める止まなくて、ページをめくるのがもどかしくもあり楽しみでもあるという感じで一気に読了した。今回、あらためて読み直してもまた同じ感興をおぼえたから、そのリズミカルでさわやかな語り口は出色のものである。

本書の真価は、なんといっても学問としての社会心理学的研究にのっとりながら、「日本人は集団主義的である」という通説を論駁している、その論述における実証性と論理性にある。たとえば社会心理学の分野で非常に有名な研究の一つにS・E・アッシュの同調行動実験というものがある。被験者をよそ

おつたサクラに囲まれたなかで、提示された線の長さを答えるものだが、サクラたちが一様に間違った答えをするようになると、被験者自身も少なくない割合で間違いに同調して答えるようになってしまふ。その同調率は、アッシュの実験で三七%だった。

この同調行動実験を用いて「日本人集団主義」説を批判する切り口がいい。部分的に省略しながら、引用してみよう。（言及されている学者名も匿名にした。）

もし被験者が日本人だったとしたら、同調率はどうなつていただろうか？ 社会心理学者の「[I氏]」は『集団主義の構造』のなかで、集合的融合的な個人の集まりである日本社会でこれを追試してみたらどうなるか。やらなくても結果は見えみえである。と書いた。

「[I氏]」は、『やらないでも』と書いたが、しらべてみると、じつは日本でも同じ実験がおこなわれていたことがわかつた。……アメリカの心理学者が、やはり、「集団主義的な日本人なら、同調率はずつと高くなるはずだ」と考えて、それを立証するために来日し、一九六〇年代の末に……日本の大学生を被験者にした実験をおこなつていたのである。

その実験では、同調率は何%になつたのだろうか？

……じつは、二五%にすぎなかつたのである。「集団主義的な日本人の同調率はずつと高いはずだ」という期待はみごとに裏切られたわけである。（五九一六〇頁）

このあと、さらに日米でおこなわれた同じようないくつかの実験の結果を平均すると、アメリカが二五%で日本が二三%に

経験のための戦い

E・リード著 菅野盾樹訳

金菱 清著

新曜社

『アーフォーダンスの心理学』で知られる著者が独自の生態学的情報理論と「プラグマティズム」を社会哲学に応用し、「直接経験」の必要性を説いた遺作。

四六判272頁・定価2730円

クイズや情報をまじえて、頭のなかをシャツフル。面白おかしく、世の中のカラクリを見抜くセンスを見につける、新感覚の社会学テキストの登場！ 四六判192頁・定価1995円

東京神田神保町2-10(税込)
電話 03-3264-4973
FAX 03-3239-2958
<http://www.shin-yo-sha.co.jp/>

なつて、はつきりとした差は認められないことを確認し、したがつて「日本人＝集団主義」説は否定される、と高野氏は結論する。

高野氏はこんな感じで小気味よく論述を進めていく。まず見もつともらしく見えるかたちで、しかしことなくうさん臭さを感じさせながら、通説にのつかった議論や言説を紹介し、ついで、社会心理学的実験や社会調査データの分析結果を数多く示して、「でも、実証データは通説をまったく支持していないんですよ」と説いていくのである。ここには、おしゃれな推理小説に似たおもしろさの味わいがある。

社会心理学プロパーの研究だけでなく、言語学、いじめ研究、年功序列賃金制、企業系列問題など、他分野の研究も広く利用されており、なかでも、廣瀬幸生と長谷川葉子という二人の言語学者による、日本語には話者本人と身内とを厳然と区別したり、「私的自己」と「公的自己」を区別するしくみが備わっているという研究が、評者には興味深かつた。高野氏はこの研究を参照して、「日本人の自己は個として確立しておらず、内集団と一体化している」というたぐいの議論は間違いだと指摘するのである。

これに関連して、よく「日本語で主語が省略されるのは、やはり『主体』意識が弱いからだ」というタイプの議論があることを思い出した。日本語の主語については、専門家集団でどう評価されているのか知らないが、私は、金谷武洋氏（『日本語

に主語はいらない』講談社、二〇〇二、『主語を抹殺した男』——評伝三上章）講談社、二〇〇六など）のファンで、同氏の主張を踏まえて言えば、「日本語には文法上の主語はない。しかし、発話の視点がどこにあるかはむしろ明確に区別されているし、述語の主体が何であるかもけつして紛らわしくはない」ということだろう。いずれにしても、日本語に主語がないとか曖昧だということから、「日本人は自他の区別が弱い」ということにはならない。

もちろん、日本語の独自性論はややもすれば日本人論と同じ誤りに陥りやすい。しかし、日本語と英語の違いを明確にすることと、英語文法をあたかも普遍的なものと見なして日本語を「特殊なもの」と位置づけるのとは異なるだろう。

三

後半で高野氏は、「日本人＝集団主義」説の由来を検討している。「対応バイアス」「確証バイアス」「可用性バイアス」などの心理学的理論装置がまず説明に動員されているが、これらは、どんなステレオタイプや偏見の成立と持続にも一般的に当てはまるものだから、とくに「日本人＝集団主義」説の由来や持続性を理解するのに役立つわけではないだろう。この点に関しては、社会心理学的説明はそれほど有効ではない。

それに対して、「オリエンタリズムとしての『集団主義』」と題された第一〇章では、もっと歴史的で知識社会学的な説明が

示唆されている。そこでは、明治の終わりから大正にかけて、学者や知識人たちの中に、西洋の個人主義に対しても本來の日本人は家族主義・国家主義などとする論調が現れてくることを指摘しながら、ジョン・ダワーの「集団主義的な日本人といふイメージは、日米合作のオリエンタリズムだ」という見解をふまえて、「オリエンタリズム」は、ヨーロッパ人がつくりあげるもの」だが、「オリエント」のほうにも、それを受け入れ、その確立に寄与するひとたちがでてくる（二四五頁）のだと説明されるのである。ここには深く考えてみるべき論点が示されているのだが、残念ながら、由来についての高野氏の考察はここで終わっている。

日本が西洋にとって異質な他者だというのは、まずもって日本人自身の認識だという点に注意すべきだろう。たぶん遅くとも明治二〇年代の民法典論争の時代から、「歐米の個人主義」に

対して、それとは異なる日本」という図式が自明のことのようになっていく。とりわけ資本主義や近代は乗り越えられるべきものだという意識が高まつた戦前には、共同体的なものや集団主義的なものなかに日本の原像を見いだそうとする試みが盛んになる。それはけつしてイデオロギー的な論説だけではなく、哲学や社会学のようなアカデミックな研究でもそうであった。戸坂潤の批判（『日本イデオロギー論』一九三五）は、あながち党派的なだけのものではなかつたとみるべきだろう。

日本異質論、日本特殊性論は、べつに欧米の研究者が軍国主義の日本やメイド・イン・ジャパンで溢れる消費市場をみて言いかねーションナリズム」を読み込むこともできる（『文化ナショナリズムの社会学』名古屋大学出版会、一九九七）。

◆◆要因の分散分析をすべてカバー
SPSSのススメ

初心者のために徹底してわかりやすく追求したSPSSガイドブック。初心者がつまずきがちな点に分け入って、くわしく解説。

竹原卓真著
A5判・272頁・定価3,990円(税込)
〔書評〕

◆◆超初心者向けSPSS統計解析マニュアル
統計の基礎から多変量解析まで 米川和雄・山崎貞政著
A5判・136頁・定価1,890円(税込)
まったくの初心者が統計解析の手法を知り、実際の解析結果を得るために、その足場となる知識のエッセンスを提供する。

〒603-8303
京都市北区紫雲十二町12-8
TEL.075-431-0361
FAX.075-431-9933
http://www.kitaohji.com

思うに、和辻哲郎の『風土』（一九三五）などは、歐米の普遍主義的視点へのある種の異議申し立てという点では後年のサイードに通じる面がある。しかし、サイードが英米の知識層に向けて英語で書いたのに対し、和辻は日本語で書いた。つまり、歐米の視点はそのままにしておいて、日本人の視点を転換することだけをめざした。むろんそこには、植民地の存在が自明であった和辻の時代に、歐米の視点に直接分け入って、それに転換を迫ろうなどというだいそれた目論見は想像だにできなかつたという事情があるだろう。その代わりにめざしたのは、一応は歐米の人文学・社会科学の用語系にのつかりながら、独自の視点からなる離れ小島を確保することだった。それは、自分自身で作った他者（西欧）という鏡に自分を映してみてアイデンティティを確認する作業に他ならない。そうした試みのあれこれが日本人論へと独自の進化をとげたのではないだろうか。

（せいやま・かずお
社会学）

盛山和夫
社会科学の理論とモデル3

権力

四六判・二二三二頁・二七三〇円

四六判・二七二二頁・二九四〇円

四六判・二七六頁・二九四〇円

原純輔・盛山和夫編
社会階層
豊かさの中の不平等

盛山和夫編

日本の階層システム4 ジエンダー・市場・家族

四六判・二七六頁・二九四〇円

四六判・二七二二頁・二九四〇円

四六判・二七二二頁・二九四〇円

富永健一
戦後日本の社会学
一つの同時代学史

A5判・四八八頁・六五一〇円

原純輔・海野道郎
社会調査演習【第2版】

A5判・二三二二頁・二六二五円

東京大学出版会（表示は税込価格）